

いただいたリアクションペーパーへの返答

2022/12/17 加納 土

講義を受講されている学生の皆様。先週(12月13日)の講義ではご清聴ありがとうございました。いただいたリアクションペーパーを読みました。拙い私の発言でしたが、すごく丁寧に応答いただけたこと嬉しいです。いくつか質問を頂いたので、それに対してごく簡単に私なりにお答えいたします。もし「沈没家族」に興味を持ってくださったら映画は一部で配信されていますし、書籍もありますのでよかったらご覧ください。

①

Q 様々な家族の在り方があるが、他の家と異なる状況を、そこにいる子どもがそれを理解し受け入れることがうまくいくようにするにはどうすればいいか？

A 自分の経験から話すと、私は沈没家族にいたとき(8歳までいた)自分とこの「家」が小学校の多くの友達とかなり違うとはあまり気付いてませんでした。そういう意味で他者と違うコンプレックスは感じていなかったです。あまり友達が共同生活してたシェアハウスに遊びにくることもなかったのが気づきにくかったのかもですね。ただ、よく考えることだけでも自分があのまま中学校とかまで沈没ハウスにいたらと思うと想像つきません。もしかしたらすごく嫌になってたかも。

いただいた質問でいうと、子どもが自分の「家」を受け入れることをうまく行くようにするためにどうすればいいのかという答えは分かりません。たまたま私はあそこが楽しかったと思えたのはラッキーだと思います。ただそれは「ふつうの家族」でも同じでそれが楽しかった子も嫌になる子もいるはずだと思います。子どもは自己決定権が根本的にないものと考え、最初から不幸だと思います。おとなが無理やり決めた環境ではあるけど、その中で精一杯愛情を与えることが少なからずできることだと思います。

②

Q 沈没家族のような育てられ方と、基本的に親だけで育てられるような家族ではどちらの方が子どものためになりそうと思うか？ 沈没家族的なものの、通常と比べたときのメリットは？

A どちらが子どものためになりそうかは僕はわかりません。子どもだった僕は沈没しか経験してないので、そうじゃなかった場合、(例えば母穂子さんが新しいパートナーと同棲して子育てとか)した時に自分がどうなっていたか想像がつかないです。ただ、育てる側だった母穂子さんからすると、「私にとってはあれじゃないと育てられなかった」と言っていました。物理的に誰かが面倒見てくれるのは貧乏なシングルマザーだった穂子さんにとっては大きなメリットだったと思います。

子どもの視点からメリットとして一つ挙げられるなら私はたくさんの人に囲まれて育ったことはすごくよかったと思います。家の中に色々な人がいる、しかもみんな「保育者」としてだけの役割ではなく、ただ遊びに来たり寂しいからという理由できていた人もいました。学校と家の往復だけでは会えない「謎のおとなたち」が家にいたことはああ世の中って色々な人がいるんだなあ子どもながらに実感できたし多様な価値観と触れ合えました。それはフツウなかなか経験できないことかも。ただ、それは先ほどの質問にもあったように、それがダメな子どももいたかもしれません。ただ、僕やともに沈没で育った2個上の女の子、2個下の女の子も多様な価値観に触れ合えたことはよかったと言っています。

③

Q 沈没家族だからこそ、嫌だなと感じた経験があるか？

A だからこそ嫌だなと思ったことはないです。もしくは、嫌だったと当時思うことはあったかもしれないけど、今の僕はそのことを覚えていません。記憶の中であえて言うなら、2個下の女の子が私の母と家の中でよく遊んでいたりがえたりすることも多かったのですが、それが自分にとってはやきもちな感じで嫌だったことはありました。それはでも兄弟間でもよくある話だと思うので、あまり沈没家族の個別な話と言いつけるのかもわかりませんが。ちなみに2個下の女の子は同じ質問に対して「家(複数の母子とシングルの若者で住んでたシェアハウス)がぼろいのがいやだった」と話していました。それも沈没家族個別の話かわからないのですけども。

④

Q こういった共同保育もアリだとは思いつつ、人の善意が前提となった危うい形だとも思った。問題もあったと思うが、こういった形で乗り越えたのか？

A 2個上の女の子とも話したのですが、誰かそこにいたおとなから虐待なり危険な目に遭わせられたことはあるかという問いで言うと、僕も彼女も全くない(もしくは覚えてない)という答えです。セキュリティ的な面で言うと、いきなり誰も知らない人が子どもと一対一になるような状況は作らないようにしようということはおとなたちの中であつたようです。かつ、友達の友達の友達くらいの範囲で広がっていったので、誰とも縁がない人というのは流石にそんなに多くなかったようです。こういった形で乗り越えたかという点、保育にコミットしたおとなたちはかなりの頻度で保育会議を開いていて、そこで問題点なりなんなりをその都度上げては改善していったその行為が大きいのだと思います。顔を合わせて、しっかり話し合いが細かくあるからこそ、それぞれの保育に対するスタンスや許せること許せないことのすり合わせができて、かつそういった濃い関係のそこにはポツと「危ない人」も入りにくいのかなと思います。とはいえ、ものすごく開かれた場所ではあつたので、危険なことが起きなかったのも先ほどと同じように「ラッキー」とも言えるかもです

⑤

Q 「家族」というものへの執着が社会的にあると考えるが、他人(血縁のない人)を家に入れて、なんでもやるのを許すために何が変わるべきか？

A 他人を家に入れることが許容できない人は多くいると思うし、そういった考えの人はあえて変わらなくてもいいと思います。ただ、「他人を家に入れて子育てをする人」のことは許容してほしいと思いますね。他人がどう子育てをするか自己決定権をもつということを広く社会で意識していけばいいのかなと思います。あとそういった権利の観点と、同時にそうせざるを得ない状況で生きている人、もしくはそちらが楽しいと思う人への想像力を忘れないようにということかなと思います。

⑥

Q 「境界線」をぼやかすというワードが今回の大きなテーマのように感じたが、「境界線」をぼやかすために行なっていることは何か？

A　すごくいいワードですね。私もぼやかしていきたいと日々思いつつも、なかなか線を区切るところがあって難しいなと思います。母、穂子さんは今、八丈島ドロップスという一般社団法人で色んな人と関わっているんですが、その第一のコンセプトは障害者やお年寄りやそうでない人もみんな混ざり合って日々色んな活動をしています。私は映画の撮影を通してなどでそれを目の当たりにして、まさしく「境界線をぼかす」ということだなと思いました。誰かに勝手に役割を与えてその中で動いてもらうのではなく、各々自由にその場にいるという光景は沈没家族とも重なりました。うまく、答えになっているかわからないですけど私はそういう意味でそんな場を作った穂子さんをリスペクトしています。